民俗
民芸双書 8

昔話と笑話

関
敬吾著

昔話と笑話

関　敬吾　著

民俗民芸双書 8

関（せき）　敬吾（けいご）

明治32年7月15日長崎県に生まる。
現在，元東洋大学教授。
著書　民話（岩波）・日本昔話集成（角川）・日本民俗学入門（改造社）・民俗学方法論（岩波）・日本の昔ばなし（岩波）

民族
民芸　双書　8　昔話と笑話

一九六六年八月三十一日　第一刷発行
一九七五年一月三十日　第七刷発行

著者　関　敬吾
発行者　岩崎治子
印刷　K M S
製本　K M S

発行所　岩崎美術社
東京都千代田区神田神保町一の六五
電話（二九二）三一二一―四
振替　東京　九〇六四八
定価は外函に明示してあります

昔話と笑話

まえがき
姥棄山考……一
桃太郎の桃……八
かちかち山の構造……一五
羽衣考……三
南方羽衣の分布……五六
蛇聟入譚……六七
兄弟譚……一〇九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

唄う骸骨……一二八
昔話を追って……一四〇
昔話への関心……一四五
昔話と民話劇……一五一
日本の笑話……一六三
昔話の伝播……一九四
昔話の宗教性……二〇八
昔話の社会性……二二

姥棄山考

去年（一九五六）の暮ごろ、姥すて山の伝説を素材にした『楢山節考』という小説が、えらく評判になっているという話をきいたが、べつに読んで見ようという意欲もおこらなかった。ところが、『日本の昔ばなし』を編んでいる際に、岩波文庫の編集部から、昔話にある姥すて山の話を入れてはどうかという話があり、たまたまこの小説の話が出て、『中央公論』を送ってもらって一読した。

私はもちろん文学を専門に研究しているわけでもなく、一民俗学徒にすぎない。この小説が創作技術上いかにすぐれており、日本の現代文学の上でどれだけの価値をもつかはわからないが、編集部に「いったいこの小説のどこがいいのですか」とたずねたほど、なんの感興もわかなかった。聞くところによると、これまでの小説に見られなかった異常な題材を取扱っている点で、また山に棄てられるという老婆のストイツシズムがよく表現されているという点で一般

の興味をひいたらしい。

その後、これと関連した新聞雑誌の批評などが目につくようになった。もちろん組織的に読んでいるわけではないが、これによって「日本人とはなにか」の疑問に答えるとか、「日本人の何千年ものあいだつづけて来た生き方が、この中にある」とか、あるいは「日本の民俗学の成果をとりいれて書いたものだ」とかいう断片的な記事が私の注意をひいた。これがこの小説に対する興味の中心であり、価値評価がこの点にあるらしい。もしこの小説を読んで、かりにも日本文化がそうだと考えられるとすれば、一『楢山節考』という小説だけの問題ではなさそうである。

この小説の主題になっている姥すて山は、その前半に一般の伝説とはちがい現実味はもちろんある。またこの伝説と関連して、この小説には山村の悲惨な生活が描かれている。われわれもまた近い過去に、食糧不足になやんだなまなましい経験をもっている。それとこれとが結びついて、強く読者に訴えるところがないでもない。しかし、生活の苦しさと老人遺棄とどんな内面的な関係があるか、生活の苦しさがはたして老人遺棄の慣習となり、この種の伝説を創り出したか、また伝説がどれだけ現実生活を反映するかということなどが、筆者の思考にうかんでくる。

もちろん、小説は歴史でないから、歴史的な事実がかならずしも描かれているわけでもなし、またその必要もない。歴史的事実と伝説的事実とも同一ではないが、伝説が創り出される社会的背景は研究されなければならないし、またこうした伝説を素材にする以上、もっと忠実に研究し、公平に考えてみることも必要であろう。

○

この小説の中心テーマになっている姥すて山または親すて山の伝説や昔話はかなり広い地域に伝承されている。それによると、親（たんに婆さんに限らないが）をすてる理由は、(1)殿様が老人をきらい、六十になると山にすてさせる、(2)老人を山にすてる慣習がある、(3)姑と嫁の仲の悪いことが原因として説かれる。その結果は、(1)孝行息子は親をすてるにしのびず、(2)息子が親をすてに行くとき、親が息子の帰り道に迷わないために道しるべに木の枝を道々すてるのに感心して、あるいは、(3)親をすてに乗せて行ったもっこをすてて帰ろうとすると、一緒に行った孫が、また父親をすてるときのためにもち帰るといったので、父親は自分の将来を考えて、親をつれ帰り家のなかにかくしておく。すると、そのころたまたま隣国から三つの難題――穴に糸を通すこと、灰縄をなうこと、馬の兄弟を見わけること（あるいは材木の梢と元を認別すること）という三つの難題を出し、解くことが出来なければ征服するといってくる。殿様

がこれを村人にはかる。孝行息子が山からつれ帰った親にきいて解決し、その報償として親の命をもらう。殿様は隣国の侵略をまぬかれ、以後老人をたいせつにするようになったと伝えている。要するに、この伝説の道徳的目的は、親に孝行をつくすことを説いたものである。このことはむしろ、ある時代の日本の道徳思想を反映しているように思われる。

○

この小説の作者はいつの時代を頭にうかべて書いているのか、時代は推測することは出来ないが、とにかく過去の山村の生活苦が老人をすてる動機として説いている。これがまた、批評家をして感心させ、「日本人とは何か」を答え、「日本人の何千年かにわたる生活の仕方」とも感ぜしめたもののようである。

このなかには民俗学が問題にするようないくつかのことがらが描かれている。

主要なテーマは老人遺棄の慣習であるが、もちろんわたくしは、日本にこうした慣習があったかどうかを示す証拠も知らない。あるいはあるかも知れないが、この伝説からは棄老の習慣を推側することは不可能である。伝説や昔話がどれだけ社会慣習を反映するかはしばらくおき、しかしこうした伝説の発生または存続を想像せしめる慣習はある。

第一は、すてるときの年齢である。小説では七十歳になっているが、伝説では六十歳という

地方が多い。この年齢は還暦と一致する。日本の過去の生活では、現在でも十五歳から六十歳までを一人前とし、村のさまざまな権利義務をもつが、六十歳になると公の一人前としての待遇は停止され、もっぱら村の長老として村の顧問役となり、神仏の行事にたずさわり、村の第一線から隠退する慣習がある。

第二は、この小説のなかでは歯が丈夫だと老人らしくないために、歯を欠くことが述べられている。この描写は小説の凄惨さをしめすための作者の技巧であるか知らないが、未開社会では成年式のときに欠歯を行う慣習がある。日本でこの慣習があったかどうかわからないが、欠歯を想像せしめる古い人骨は出ている。

この小説の背景は甲州か信州地方のようであるが、この伝説に欠歯のことが語られているかどうか。筆者はちがった意味で興味をもつ。他の地方では老人が欠けた歯を保存しておいて、一本は本山に、他は家の仏壇におさめておく慣習はある。

第三に、この伝説を発生せしめ、またささえるもっとも強い慣習は日本の埋葬法であろう。そのひとつは風葬である。風葬という言葉にも問題はあるが、死者を洞窟内に葬り、あるいは放置する葬法である。この葬法は西南諸島ではかつて行われていた。現在も、わたしの知る限りではただ一ヵ所だけこうした葬法を行っている島がある。現在との結びつきは忘れられ、戦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

死者の遺骸を葬ったと伝えられ、洞窟内に骸骨が見られる。内地でももとこうした葬法があったかどうか明瞭ではない。筆者はまだ見ていないが、鹿児島県のあるところにあるということを聞いた。日本ではかつては埋葬するところと、お参りするところとは別であって死体を葬るところは、多くは山奥か野原か海浜か、あまり人の通らぬところで、ここは永続的な墓標などはおかず、やがて不明になるところであった。ここをいけ墓とか棄て墓といった。それを記憶の存在がなくなるころは、自然にその場所を忘れていったのである。これに対して参るところは屋敷の近くか、寺の境内などであり、これを参り墓、葬り墓あるいは寺墓などといっている。

昭和四年七月二十六日の「大阪朝日新聞」につぎのような記事がある。滋賀県のある山村だが、名はあげない。

共同墓地にあたり一面なに人のものとも知れない人骨散乱して太古そのままの惨状を呈し、あるものは荒縄をかけたままの棺の上に木のかわりに石をおき、周囲を雑木で掩うているのみで墓標すらなく、焼香場のごときも草ぼうぼうと生い茂って云々。調査の結果、土地の風俗であることを知ったと、駐在巡査が報告した云々。この村に筆者が訪れたのは、それから七、八年の後であったが、もちろん記事の通りではなかった。最近に出た岩波新書の『村の記録』という本にも、ここと近い地方に、雨乞に池の神を怒らせるためにむくろを掘出したことを誌し

てあるが、普通の埋葬ではそう容易に骸骨を掘り出せるものでなく、これなども浅葬のように思われ、この地方ではあるいはこうした葬法がかつてはひろく行われていたのかも知れない。

死者と生きている者との間の記憶の切れた埋葬場のこうした光景は、この伝説をささえる根拠ともなり、それが老人遺棄――の伝説を作り出すのに自然であろう。

もちろん、親をあるいは老人を惨酷に取扱う人間もあろう。しかしそれは慣習でも制度でもない。この小説がたんなる空想と見るなら別だが、食にこまって親をすてることが日本の過去の慣習であり、これが日本人のなん千年ものあいだつづけてきた生き方であると速断し、感心する以前に、もっとこうした問題を掘り下げて見る必要があろう。

―文庫・一九五七・五―

桃太郎の桃

桃太郎昔話の鬼が島征伐の一齣をとらえて、やれ侵略行為だ、強盗行為だとけなしつけ、その上日本人が戦争好きの民族になった——事実日本人がそうであるかどうか知らないが——という責任までがわが小英雄・桃太郎が負わされている。鬼が島ではないが、化物や悪魔を征服して宝物をとって来るという主題の昔話は、世界いたるところにある。すると、こういう主題の昔話をきいて育ったすべての民族が好戦民族であるということになる。もしそうだとすると、彼我相殺され五分五分で、いずれの民族も同じことになる。桃太郎の昔話をもつ日本人だけが、かならずしも戦争好きとはいえなくなる。いずれも愚劣な推論である。

桃太郎の鬼が島は未知の国である。どこの民族にとっても、未知の国は神秘の国であり宝の国でもあった。日本を知らなかったマルコポーロにとっては、この貧乏国が黄金の国であった。宝をうるためには、濡れ手に粟式には行かない。さまざまな困難を経て妨害を排除しなければ

宝も富もえられない。桃太郎昔話には、鬼との外交交渉はわずかしか語られていないが、主人公の行為は宝の国に行って、宝をえようとするのに対して、これに防害を加えるものを排除する行為を象徴したものであるかも知れない。

そういうことよりは、どうして人が桃からうまれるかという素朴な子供の疑問に、答えることがもっと重要な問題であるような気がする。もっとも、子供がそうした疑問を起すようになると、もうその子供は桃太郎昔話をきく興味のない年齢に達しているのである。こんな疑問を起さないで、大人も子供もきくところに、この昔話の長い生命があるのかも知れない。

しかし、人が桃からどうしてうまれるかという疑問を解くことは、困難だろう。植物から人がうまれるということを信じていた時代が、かつてはあったのであろうか、それがいつの時代であるかを知ることもむずかしい。一応われわれは、そうした時代がかつてあったということを前提として考えて見なければならない。

ところが、桃太郎にかぎらず、植物または果実から人がうまれることを主題にした昔話は多い。瓜子姫は瓜からうまれている。竹取のかぐや姫は竹の節の中からうまれている。竹からうまれた竹子姫や竹の子童児の話はいまも語られている地方がある。葭からうまれた子供もある。問題は、多くの植物の中から、どうしてこうした特定の植物だけが選ばれたかということが問

題である。竹も葭も節と節との間に空間があり、瓜の中はうつろである。うつろの中にはなにか神秘的なものがかくされているような気もする。竹も葭も瓜も生長が早い。桃も、桃・栗三年などといって、実を結ぶのが早い。桃は瓜のように中はうつろではないが、桃が箱の中にはいって流れて来たと語っているところもある。こういう点にも問題があるかも知れない。

桃の木は、またしばしば呪的目的のために使うところが多い。正月、二月に行われる神事にモモテという弓の行事がある。年占行事のようであるが、このとき用いる弓を桃の木で作っているところがある。古代から桃には呪力が認められ、この神秘的な力を利用した話がある。いざなぎの命が、黄泉の国に妻をすててのがれ帰るとき、追いすがって来た黄泉醜女をはらうために、桃の実を三つちぎって投げつけ、それで悪霊からのがれることが出来た。おれを助けてくれたように、人間たちが苦しみにおちたとき、助けてやってくれといいつけて、桃におほかむつけの命という名をやったという伝承もある。

○

桃太郎昔話の最初の解説者、馬琴は『燕石雑誌』に「桃は仙木にして百鬼精物を殺す功がある」と、中国の書物から引用していっている。中国でも、桃は邪悪をはらう呪力をもち、長生不老をもたらすと信じられていた。西王母が、彼の東方朔が盗み食いをしたという三千年の桃

の実をもっていたという話は、だれ知らぬものはない。桃に対する日本人の信仰が、この中国思想とどんな関係にあるかは別問題として、中国・朝鮮の道教では桃の実をとうとぶ信仰が広く存在した。

桃はまた女性のシムボルでもあり、生殖の象徴でもあった。この点、ヨーロッパその他の民間信仰のリンゴとにている。リンゴも成熟のシムボルであり、愛のシムボルでもあり、また林檎樹は生命の樹でもあった。こうした信仰は桃の実の形の類似によって起ったかも知れない。わが国でも桃にかぎらず、果実を生殖のシムボルとしたり、魔除に利用する例は多い。人がまた花の中に身をかくし、再び人間に還るという信仰とともに、ある特定の樹の鋸屑が人間になるという信仰もまた、他の民族では相応に古くからあった（兄弟譚参照）。問題はどちらが本源的で、どちらが派生かということになるが、こんな大きな問題は誰も答えられないし、仮設の上に仮説がかさねられることになりそうだ。

しかし、桃と股、桃と百の言葉の上からの類推は、その類似音をもたない民族にもこれと類似の信仰があるかぎり、語音による説明では十分に説得することは出来ない。また、モモという語は、スモモ、ヤマモモなどの名もあるように、果実の意味をもったようで、形の類似による類推もまたあやうくなる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com